

京都国立博物館国際シンポジウム

# アジアの 博物館教育は、いま

—国立博物館の事例から—

2023年2月4日（土） 13時～17時（日本時間）

ハイブリッド式

京都国立博物館平成知新館講堂

オンラインZoomウェビナー

同時通訳（日・英・韓・中）



主催：京都国立博物館

## テーマ

日本における博物館教育（ミュージアム・エデュケーション）は、この分野の先進国である欧米の理念や手法を積極的に取り入れ、進展してきました。欧米の博物館教育の動向は常に注視され、頻繁に紹介されています。また、欧米の大学で博物館教育学を修めた人々が、日本各地で教育普及担当として活躍しています。

一方、地理的に近いアジア地域の博物館においても、様々な教育プログラムが積極的に行われてきましたが、これまで担当者同士の交流は限られていました。このシンポジウムでは、隣人同士が互いのバック・グラウンドと現状を開かれた場で共有し、参加者とともに学び合うことで、これからの博物館教育のあり方を探ろうとするものです。



©Kyoto National Museum

# スケジュール

- 13:00～13:05 開会の挨拶  
松本 伸之（京都国立博物館 館長）
- 13:05～13:45 事例報告・趣旨説明  
「博物館と人を繋ぐ—文化財ソムリエと京博ナビゲーター」  
水谷亜希（京都国立博物館）
- 13:45～14:25 事例報告  
「過去と遊ぶ—韓国国立中央博物館のこども博物館」  
チョヘジン（曹惠珍）氏（韓国 国立清州博物館）
- 14:25～14:35 休憩
- 14:35～15:15 事例報告  
「つながりの創造—来館者を魅了するシンガポール国立博物館」  
フーミンリ（胡敏莉）氏（シンガポール国立博物館）
- 15:15～15:55 事例報告  
「多民族共生に向けた博物館教育の試みと、  
「探究展示 テンパテンパ」」  
笹木 一義氏（国立アイヌ民族博物館）
- 15:55～16:05 休憩・会場調整
- 16:05～16:50 参加者からの質問をふまえて登壇者がディスカッション
- 16:50～17:00 閉会の挨拶  
栗原 祐司（京都国立博物館 副館長）



## 博物館と人を繋ぐ —文化財ソムリエと京博ナビゲーター—

水谷 亜希  
京都国立博物館



京都国立博物館は、明治30年（1897）、京都市の東山地域に開館しました。主に古代から江戸時代にかけての、京都を中心とした貴重な文化財を収蔵し、それらを守り、伝えることを使命としています。現在の収蔵品は15,000件に迫り、そのうちの半数近くは、社寺などからお預かりしている寄託品が占めています。

当館の教育活動の先駆けとしての、研究者による専門的な講座は大正13年（1924）に始まり、現在まで続いています。一方、幅広い対象に向けた教育活動は、平成24年（2012）に教育室が設置されてから本格化しました。現在の教育室のメンバーは、室長（作品担当兼務）1名、研究員（教育担当）1名、事務補佐員2名の計4名です。このメンバーで、講座、ワークショップ、ハンズ・オン教材の開発・実践、訪問授業、ボランティア育成・運営、学校団体対応、セルフガイドやワークシートの作成、入門的な特集展示の企画などを担当しています。

今回の発表では、京都国立博物館の教育活動の中でも特徴的な「文化財ソムリエ」と「京博ナビゲーター」に焦点をあてます。「文化財ソムリエ」約20名は、京都市立の小中学校で訪問授業を行う大学生・院生です。「京博ナビゲーター」約200名は、博物館の館内で、ハンズ・オンのコーナーやワークショップを担当します。博物館と人を繋ぐ存在である彼らが、どのような活動を行い、何を生み出してきたのかを紹介します。またそれらの活動が、どのような先行事例・背景をもとに生まれたかを辿ることで、近年の日本の博物館教育の一側面を紹介します。合わせて現在の課題を共有することで、本シンポジウムにおいて、これからの博物館教育のあり方を考えるためのきっかけとします。





©Kyoto National Museum

©Kyoto National Museum



## 水谷 亜希 MIZUTANI Aki

京都国立博物館 教育室 主任研究員。同志社大学大学院で芸術学の修士号を取得。関市立篠田桃紅美術空間、岐阜県美術館を経て、2009年より教育担当として京都国立博物館に勤務。入門的な特集展示の企画、ボランティア運営・育成、ワークショップ企画、学校教育との連携、セルフガイドの作成など、さまざまな事業を担当。文化財に初めて接する人や子ども達に、どのように働きかければ、楽しい出会いを演出できるのか考察・実践している。



©Kyoto National Museum

## 過去と遊ぶー 韓国国立中央博物館のこども博物館



チョ ヘジン (曹惠珍)

韓国国立清州博物館

子どもたちは、学ぶこと、新しい技術に挑戦することに興味を持ち、躊躇することはありません。彼らは常に自分自身を精神的、肉体的にテストし、測定する準備ができています。難しい謎を解いたり、ブロックのピースを組み合わせたたりするのが好きなのです。人類の歴史は、発見、発明、芸術的達成、実験、革新の物語であり、これらの特性は子ども時代と多くの点で共通します。子どもにとって、過去は別世界なのです。そのため、歴史展示は子どもたちが探究心を持つための環境を提供することができるのです。子どもにとって、「探索する」という行為は本能的なものです。見慣れない空間に子どもを招き入れ、五感を使って新しい世界を心ゆくまで探検させることが、子ども向け歴史展示の意義であり価値なのです。

子ども向けの展示では、博物館が所蔵する文化財そのものは展示されません。はたして子ども博物館は博物館と言えるのでしょうか。美術品や工芸品がない博物館というのはいり得るのでしょうか。画家の絵筆やイーゼル、作品に使われた果物などのオブジェ、風景写真、再現されたアトリエ空間、作家のインタビュー映像などの展示を通して、その作家の作品を想像することができるかもしれません。作品そのものを見せるのではなく、作家を取り巻くさまざまな要素を見せる博物館も、あり得るのではないのでしょうか。数年前に韓国国立近現代美術館で見た「伊丹潤一風の建築」展では、建築物ではなく、伊丹氏のドローイングや設計図、模型、インタビュー映像などを通して、伊丹氏の作品を見ることができました。建築家の芸術的な世界とその作品をよりよく理解するための素晴らしい展覧会でした。



歴史博物館はどうでしょうか。遺物を使わない展示は可能なのでしょうか。歴史は生命です。歴史は人々によって創られ、経験され、絶えず変化しています。歴史は人々の経験によって成り立っています。生命は遺物だけでは説明できません。博物館は人類の足跡と歴史を示す場所と言えます。ならば、遺物を使わずに歴史を展示することも、可能ではないでしょうか。過去に生きた人々の「物語」を伝えることに、重点を置いた歴史展示ができるのではないのでしょうか。

韓国国立中央博物館と国立博物館13館の子ども博物館は、過去に生きた人々の物語を伝え、子どもたちがその空間を探索し、自分自身の物語を発見できるような空間になっています。「石臼で穀物を挽くとき、どれくらいの時間がかかるの?」「絵の中の人たちは実在の人物なの?」「朝鮮王朝の人たちも旅をしていたの?」展示では、私たちの日常生活に関連した歴史が紹介されています。さまざまな体験型展示を通して、昔の人々の暮らしの様子をより生き生きと、より魅力的に子どもたちに伝えていきたいと考えています。今回の発表では、国立中央博物館の子ども博物館の歴史と展示物を紹介しながら、子ども博物館の価値と意義について考察します。

## チョ ヘジン (曹惠珍) CHO Hyejin



韓国国立清州博物館教育担当学芸研究士。2022年12月まで、ソウルの韓国国立中央博物館教育部の教育担当学芸研究士を務める。ソウルの漢陽大学で歴史学の学士号を取得し、ロンドンのレスター大学で博物館学の修士号を取得している。博物館の利用者と教育プログラムが、展示とどのように相互作用するかについて興味がある。2007年から2020年まで、韓国国立中央博物館の子ども博物館部に勤務し、子どもの展示を担当し、子ども博物館の教育的可能性を探った。その後、教育部に異動し、「博物館教育オンラインプラットフォーム」の構築や障がい者のための教育空間づくりに携わる。

Eメールは  
hjchocho@korea.kr

# つながりの創造—来館者を魅了する シンガポール国立博物館

フー ミンリ (胡敏莉)

シンガポール国立博物館



シンガポール国立博物館は、シンガポールや世界にまつわる物語によって感動を生み出すことを目的とした、シンガポールで最も古い博物館です。シンガポールの歴史、遺産、文化を含む物語を紹介する国立博物館として、来館者とその物語、あるいは博物館のコレクション、さらには博物館そのものとのつながりを創出することに重点を置いています。博物館では、来館者向けのプログラムにおいて、どのようにそれを実現しようとしてきたのでしょうか？



©National Museum of Singapore

過去6年間、当館は以下の理由から、子供（支援の必要な子供を含む）のいる家族連れ、高齢者（認知症の高齢者を含む）、広い範囲の生徒を対象とした、いくつかの取り組みに着手してきました。

## 家族連れ

家族連れは、レジャーのため、そしてシンガポールについて学ぶために来館しているはずですが、博物館はどうすれば、支援の必要な子供をもつ家族を含め、より多くの家族にとってやさしい空間となり、一緒に学ぶ機会を提供できるのでしょうか。

## 高齢者

博物館の展示品やその物語は、高齢者から生き生きとした会話を引き出すきっかけをたくさん持っています。認知症の人を含む高齢者にとって、楽しく、また来たくなり、家族や友人とシンガポールについての物語を分かち合えるような、そんな空間に博物館はなれるでしょうか。

## 生徒

博物館は、シンガポールの歴史や文化財に対する興味や好奇心を呼び起こすような体験を、幼いうちにすることが重要だと考えています。若者たちの興味は多様です。彼らとつながるにはどんな方法や機会が適しているのでしょうか。

この発表では、博物館の取り組みの詳細（着想やアプローチ、学びのポイント）と、今後の展望について紹介します。



©National Museum of Singapore

## フー ミンリ（胡敏莉）

### FOO Min Li

シンガポール国立博物館（NMS）の副館長。学校、家族、一般市民、高齢者などを対象にしたプログラムチームのリーダーを務める。NMS着任以前は、2009年から2016年まで、国家遺産局の遺跡・記念物保護部門で研究と教育に携わり、シンガポールの国定記念物の歴史について研究し、学校や一般向けのプログラムを通じてそれらを紹介してきた。NMSでは、シンガポール・ヘリテージ・フェスティバルやナショナル・デー・セレブレーションのプログラムをコーディネートしてきた。現在は、教育担当の同僚と協力して、博物館での生徒の学習体験を高めるプログラムや、博物館における高齢者との交流などを担当している。



## 多民族共生に向けた博物館教育の試みと、 「探究展示 テンパテンパ」



笹木 一義

国立アイヌ民族博物館

アヌココロ アイヌ イコロマケナル

国立アイヌ民族博物館は、先住民族であるアイヌの歴史と文化を展示・調査研究するための、国内初の国立博物館として、2020年7月に北海道白老郡白老町のポロト湖畔に開館しました。札幌から約1時間の距離にあります、「ウアイヌコロコタン 民族共生象徴空間」（愛称：ウポポイ）の中核施設のひとつとして、文化庁により設置された博物館です。当館が建つこの場所は2018年までポロトコタンの愛称で親しまれた民間の「アイヌ民族博物館」が53年間、アイヌ文化伝承の活動を続けてきた場所でもあり、そちらから引き継いだ資料も含め約一万点のアイヌ関連資料を収蔵しています。

「先住民族であるアイヌの尊厳を尊重し、国内外にアイヌの歴史・文化等に関する正しい認識と理解を促進するとともに、新たなアイヌ文化の創造及び発展に寄与する」という博物館の理念のもと、研究学芸部の4つの室と、5分野1機能の専門グループが併置されています。その中の教育普及室と教育グループの研究員・学芸員数名とエデュケーター6名が、博物館の教育活動を主に研究、企画、実施しています。講座、ワークショップ、ギャラリートツアーなどを行うだけでなく、基本展示室に研究学芸部員が必ず1名おり、来館者からの質問に対応する体制を取っています。



本発表では、日本国内でのアイヌ民族、アイヌ文化に対する認知状況をふまえたうえで、当館ならびにウポポイの来館者に、「どのように多民族共生について考えるきっかけを持ち帰ってもらえるか」の試みを、館内の教育事業や展示室での対話などをもとに紹介します。また、当館基本展示室内には博物館教育を主眼に置いた展示として「探究展示 テンパテンパ」があります。探究展示は、体験と基本展示室のテーマ・資料とをつなげるツールとして設計された、18の体験ユニットからなる展示です。探究展示とそれを通じた教育活動の試みを紹介します。

## 笹木 一義

### SASAKI Kazuyoshi

国立アイヌ民族博物館 研究学芸部 研究主査。せんだいメディアテーク（仙台市）、日本科学未来館（東京都）などで常設展示、企画展、ワークショップ、教育普及活動、来館者を交えた実証実験などを担当。2017年11月より国立アイヌ民族博物館設立準備室に赴任。2020年7月の開館に向け、常設展示内の体験展示コーナー「探究展示 テンパテンパ」の開発、教育普及、特別展示、ライブラリ整備等に携わる。開館後は主に教育普及事業を担当。専門は博物館学（来館者研究）。



©National Ainu Museum 国立アイヌ民族博物館



©National Ainu Museum 国立アイヌ民族博物館



©National Ainu Museum 国立アイヌ民族博物館



©Kyoto National Museum

### お問い合わせ

〒605-0931 京都市東山区茶屋町527  
京都国立博物館 学芸部 調査・国際連携室  
research\_kyohaku@nich.go.jp  
075-531-7518

当日のプログラム及びその他の情報は、当館のウェブサイトをご参照ください。  
Symposium program and more information is available on the museum website.

[www.kyohaku.go.jp](http://www.kyohaku.go.jp)

Organized by the Kyoto National Museum